

誰もが、共に学び、生きる社会を
創るために

—令和2年度九州・沖縄ブロック
コンファレンス 総括—

九州大学
岡 幸江

本日の会に貫かれていた
キーワード

”チャレンジ！”

まず、社会教育・生涯学習の視点から、
「**学びの当事者になる**」ことについて、
考えてみたいと思います。

いま、私たちをとりまく社会は
どういう社会なのでしょう？

- できるだけ危機・問題は未然に排除する
- 安全安心にむけて管理体制を強める

それはクリーンで安全な、問題のない社会
かもしれません。

けれど、障がいを抱える人は、施設に閉じ
込めるのが問題ない、そこから社会へ出る
のはわがまま、なのでしょう。

それは、誰にとっても息苦しい社会な
のではないのでしょうか。

「チャレンジ」の 先輩たちの姿 として。

障がいのある人も、ない人も、
「当事者になる」ことがこんなにも難しい
社会に、私たちは生きています。

そんななかで、今日のカンファレンスには、障
がいを超えて「チャレンジし」、
そのチャレンジを「自らの誇り」にしていく人
の姿に満ちていました。

その姿に、多様な方々が心を動かされ、「学
び」を得てきたのではないのでしょうか。
壁を越えて、自らを当事者に育てていく。
その先輩の姿に学ぶことは少なくありません。

誰もがチャレンジ
のできる社会へ

なぜ「障がいのある人の生涯学習」が重要な
のでしょうか。

それは、「私たちの問題」であるからに
ほかなりません。

「学びの当事者」が地域に広がっていく。

それが、

「多様性をこえて、共に生きる社会」が
育っていくということではないでしょうか。

「学び」の 当事者とは？

ちなみに、ここでいう「学び」とは
「お勉強」「机の上の学習」のみをさすもの
ではありません。

生きていくために、自分の暮らしのために
自ら気持ちをたちあげて、
自分・他者・社会と出会っていく歩みの全体
を、「学び」ととらえています。

音楽や絵画といった文化も、
自然と出会う野外活動も、
仲間と語り合うことも、
生きていくために不可欠な、
大切な「学び」の一環です。

そのために。
必要なのは
「理解」？

宮崎県が今回行った調査には
「理解が得られない。へんな人に見られる」
「差別はなくなるらない」
といった切実な声が多々寄せられていました。

では、どうすれば理解は広がるのでしょうか。

調査では、県への要望として、
「とりくみより、まず理解を広げてほしい」と
でていましたが…。

確かに基本的知識は必要。

教科書や冊子でできることはあります。
でも実はその限界に目を向けることが、
いまはむしろ大事なのでは？

生涯学習として、
社会・地域で
交流を通して
学び合うことの
意味

ー地域に生きる人にとって
障がいをもって生きるということを、
「頭」で理解することの難しさ。

ー障がいをもって生きる人にとって
たったひとりで、チャレンジにふみだすこ
と、新しい世界に出会っていくことの、
難しさ。

今日の各報告で何度も語られていた
「学びあい」ということばの意味を、
私たちはどれくらい、共有できたでしょうか。

「チャレンジ」
への細やかな階
段（しくみ）を、
細やかに持ち合
わせる社会を

「学びあい」が豊かに展開される社会。
それは、障がいを持つ人が、また
その傍らにいる人が、
ともに「チャレンジ」にむきあっていく
ことを支え合う社会なのではないでしょ
うか。